

降臨節も第三週になりました。あと二週間ほどで私たちは待望のクリスマスを迎えます。心の準備をしながらその日を待ち望みます私たちに、今日の福音書は救い主について教えております。

主イエスが誕生される六箇月前に主イエスの親戚に当たる洗礼者ヨハネが誕生したことは先週学びました。このヨハネは主イエスとこの世的な結び付きがあったというだけではなくて、主イエスの前に主なる神より遣わされた者であり、道を備えるものとして人々に悔い改めの洗礼を伝えていたのでした。ヨハネはその後領主ヘロデが罪を犯したのを非難したのが原因で牢屋に入れられてしまいました。ヨハネは自分の命が間もなく終わろうとしているのを知っておりました。そしてすぐに首を切られてしまうことになるのです。そのようなとき、ヨハネは心配がありました。主イエスが登場し、道を備えるという自分の使命は終わろうとしている。しかし主イエスは本当に救い主なのだろうか。そう信じていいのだろうか。ヨハネは安心したかったのかも知れませんが。生命の危険の中で、主イエスより「わたしがそれである。安心しなさい」。との言葉がほしかったのでしょうか。弟子を遣わして主イエスにその質問をさせたのです。それに対して主イエスの答えはこうでした。…

主イエスの答えはこのように、あなたは私を誰と見るのか、救い主として受け止めるのか。どうなのか。との逆の問いかけだったのです。救い主とは説得されて認めるものではない。自分で受け入れていくものであることを示されたのです。主イエスはその伝道生涯の中で一度も、私が救い主だ、認めなさい。そう説得されたことはありませんでした。主イエスの教え、行い、それを見た人が自分で救い主として受け入れた、聖書はそう語っているのです。私たちは聖書の中に出て来る主イエスを見てどう思っているのでしょうか。また時代を越えてこの世にそして私たちに働かれる主イエスをみて、救い主と受け止めているのでしょうか。私たちの心の中に救い主は生きているのでしょうか。本日はそのことを振り返り、私たちの心の救い主、私たちに働き掛けておられる主イエスを受けとめている日であります。

そして主イエスの前では、人間には決して救えない人、側にいることしか出来ない人、近くにいても何も出来ないそういう人が慰められ、力を与えられ、励まされていった。聖書はこれが事実であると語っているのです。そして私た

ちに働き掛ける同じような力をあなたは感じないか、その働き掛ける方の姿を感じないか、貴方にそれが分かるとすれば、それは誰か、あなたはその方を何と受け止めるのか。その問いかけであるのです。救い主はこのように私たちに働き掛け、私たちの決断を待っておられるのです。

この世の人で一番偉大だった人はヨハネでありました。しかしそのヨハネも天国の最も小さい存在よりもさらに小さいというのです。天国の存在の前に誇れる人、大きなものはいないというのです。ここにヨハネは自分に与えられた使命を十分に果し、主なる神に義とされたことを知ります。悔い改めを伝えていたところで捕えられ、そのまま殉教したヨハネは、志半ばで倒れた気の毒な人にも思えますが、そうではなく、彼は荒野の声であり、それで十分とされたということなのです。このヨハネの姿は、私たちが主なる神の前に偉大な存在でなければならないのではなく、与えられた使命を十分に果すことが大切であることを教えております。ヨハネの存在を通して語られた救い主の姿を、私たちそれぞれも問い直してみたいものです。